学成立三週年のために執筆したものであつたのであつた。毛沢東のほかに、劉少奇、朱徳、董心武、林伯渠、徐特立らの党幹部はしよつちゆうここへ来ては講演をしており、前線から延安へ帰つて来た軍政幹部は必ずここへ来て報告していた。

抗日軍政大学の第一期から第四期までの動向については、すでに述べたので、ここで再び触れることを避けるが、一九三八年十月、抗日軍政大学総校と第一分校は太行山へ、第二分校は晋察冀（阜平県）へ出発し、日本軍の背後で幹部を養成するという新任務に着手した。とくに三九年以降の陝甘寧辺区に対する国民党軍の封鎖が強化するにともない、日本軍の背後で幹部を養成する必要が増大した。こうして太行山にさらに第六分校が設けられ、新四軍にも総分校が設けられ、一九三六年から四五年のまでに各抗日根拠地で十二ヵ所（八路軍地区で十ヵ所ともいう）の分校が設けられ、本校、分校あわせて十余万人（二十余万人ともいう）の革命幹部を養成した。

一九四五年抗日戦争が終わると、本校と各分校は中国人民解放軍軍事政治大学と改称され、ひきつづき革命幹部の養成にあたつたが、何長工は次のように述べている。すなわち、抗日戦争が終わると、抗日軍政大学総校と延安の魯迅芸術学院などの学校は、東北へ挺進せよという新任務をあたえられた。東北では抗日軍政大学は東北軍政大学と改名し、四つの分校をもち、数万の軍政幹部を養成した。とくに注目すべきは、多数の蒙古族、朝鮮族の幹部を養成するための分校を二校もつたことであり、また新兵の動員訓練に、旧満洲国軍隊の改造に、寝返りをうつたり捕虜になつたりした蔣介石軍の改造にも、大きな役割りを果したことである。たとえば、蔣介石軍のなかで最も頑強であつた新一軍、新六軍の捕虜将兵の多くは、東北軍政大学で改造の第一歩を踏み出したのである。こうして一九四八年東北の人民解放軍の関内進出にともない、東北軍政大学も関内に進出し、全国解放後、軍政大学その関係部門は合併拡張されて近代的軍事学校となり、軍政幹部養成の二十年に近い歴史の幕を閉じたのである。

（一九六六・九・一六）

批評と紹介　辛島

ニーラカンタ＝シャーストリー著

インド史の史料

——とくに南インド史の——

辛島　昇

本書は、インド史学界の長老であり、南インド史の大家で

あるニーラカンタ＝シャーストリー氏[1]が、ボンベイにある Heras Institute of Indian History and Culture において行つた講演、第二回 Heras Memorial Lectures[2] を収録したものであり、その章立ては、次のようになつている。

第一章　Sources of Indian History with Special Reference to South India.

第二章　South India to about A.D. 1300.[3]

第三章　South India from the Fourteenth Century.

以上の章立てからのみ判断すれば、第一章は南インド史の史料についての記述であり、以下の二章は、南インドの通史であるように思われるであろうが、実際には、第一章は、とくに南インド史というよりは、インド史全般の史料についての記述であり、第二章、第三章は、南インド史の各時代の問題を、その史料の面から解説したものである。

第一章と以下の章とは、内容的に多少重複するところがあるが、ともかく、それらの章の内容につき、今少し詳しく述べてみよう。まず、第一章でシャーストリー氏は、インド史の研究が一八世紀後半にどのようにして開始されたかということから説き起して、自己の研究上の経験や、今日の学会・大学の在り方について述べ、つぎに、史料を幾つかの範疇に分類したのちに、先史時代からの各時代について、その史料と研究の概要につき記述している。第二章からは、南インドの問題であり、そこでは、一九世紀における Bruce Foote 等の南インド先史考古学の研究に始まつて、近年やかましいドラヴィダ民族移住経路の問題、紀元前後における南インドへの北インド文化の波及、六・七世紀における地方統一王朝の出現、それにつづくチョーラ・チャールキヤ時代から、十二・三世紀の分裂の時代に至る間の諸問題がとり挙げられ、それが、それぞれの時代に存在する考古学上の遺跡・遺物、土着・外国の文献、刻文、貨幣等の史料に即して解説されている。第三章では、トゥグルク・ハルジーのデリー王朝による南インド侵入に始まつて、バフマニー・ヴィジャヤナガル時代、それにつづく混乱と、マラータの侵出、フランス・イギリスの確執から、イギリスの統治に至る間の問題が、ペルシャ語・地方語の各種文献、外国人の旅行記、ミショナリーの記録、フランス・イギリスの行政上の記録等の史料の面から述べられている。

以上から判るように、本書は言わば、南インド史の史料解説なのであるが、以下に、その特色と考えられる幾つかの点について述べよう。シャーストリー氏には、本書と同様の目的をもつ著作として、他に Historical Method in Relation to Indian History. Madras, 1956 (H.S. Ramanna 氏との共著)[4] があり、その書と対比させると本書の特色は一層はつきりする。この Historical Method の方はつぎのような

章立てをもち、

1. General Principles.
2. The Nature and Significance of Historical Method.
3. Philosophy of History.
4. The Sources of History in Relation to Indian History.
   Ancient i) Literature
   ii) Archaeology
   iii) Numismatics
   iv) Chronology
5. The Sources for Medieval and Modern Indian History.
6. Development of Indian Historiography.

マイソール大学のインドロジーの修士の学生を対象とする教授資料として書かれたものである。そのため、全体の調子が生硬で、内容も歴史研究の意味・方法論の方にかなりの重点が置かれている。それに対して本書は、実際の歴史の流れにのっとって色々の史料が説明されているので、記述が生き生きとしていて、非常に読み易い。それは、本書が講演に基いていることにもよるのであろうが、一つの特色である。つぎに、これは当然のことであるが、本書には Historical Method 出版後に発表された幾つかの著作が利用されていて、[5] それだけ内容が豊富になつている。[6] たとえば、九九頁から一〇三頁にかけてのフランス資料の記述がそれである。また、その例とは多少異るが、Historical Method の方では、単にそのような本があるとしか触れられていなかつた John Correia-Afonso, S.J.: Jesuit Letters and Indian History, Bombay, 1955 から多くの引用がなされ、それらジュスイット会関係の資料の重要性が強調されているのも一つの相異であろう。

つぎに、特色というよりは、本書のもつ一つの特別の意味について述べると、それは、第三章における一四世紀からイギリス統治に至る間の史料についての解説である。南インド史の通史としては、同じくシャーストリー氏の A History of South India. Oxford, Rev. ed. 1958 が目下のところ唯一にして最良の概説であるが、遺憾なことに、その記述はヴィジャヤナガル末期で終つており、一七世紀から今世紀に至る間の南インドについては、未だに適当な概説がない。そのことは、その時代の研究を志す者にとつて極めて不幸な事態である。ところが、本書の第三章は、その時代の概説ではないが、しかし、そこでは、その時代についての研究史料が、その時代の色々の問題に即して述べられており、[7] そのことは明らかに概説の欠を補うものである。それは、その時代

の研究を志す者にとつての福音であり、本書のもつ一つの特別の意味といいうる。

しかし、また、本書には、幾つかの惜しまれる点、こうあつてほしかつたと思われる点がないではない。その一・二を記すと、まず、第一は、ビブリオグラフィーの不完全さである。本書は史料解説であるだけに、その文中には当然多くの文献史料が挙げられている。しかし、その挙げ方は、そのような文献史料があるというだけに止まつて、その文献のテキストがどのような形で出版されているのかが明らかにされていない場合が多い。もちろん、有名な文献は容易にその出版の状況を知ることが出来るし、また、かなりの数のものは、本書巻末のビブリオグラフィー（一八点の書名が挙げられている）に挙げられている書籍に当ることによつて知り得るであろうが、タミル語・カンナダ語・テルグ語等、南インドの諸言語で書かれた文献史料は、巻末ビブリオグラフィーに挙げられている書籍からは知り得ず、また、筆者の経験をもつてすると、それら諸言語の文献テキストの出版状況は、色々の専門書に当つてもはつきりしない場合が多い。本書が有益な史料解説であるだけに、その点についての配慮がなされなかつたことは大変に残念である。つぎに、第三章の終りは、一応近代から民族運動に至る時期に及んでいるが、イギリス統治時代以降の時期についての記述は余りにも簡略に過ぎる。これは、シャーストリー氏が、近・現代史の専門家でないことにもよるのであろうが、その方面の研究の進展が今後に望まれるだけに、これまた大変に惜しまれる。

しかし、本書の如き幅広い史料解説は、南インド史の研究者・開拓者として、長年にわたつて第一線での活躍をつづけてきたシャーストリー氏にしてはじめて著わし得るところのものであり、その点、他の追随を許さないものである。また、インドにおける歴史学会の在り方に対する反省や、数多くの刻文についてのリスト作成の必要性の提言等、折にふれて述べられている苦言・提言の類は、そのような氏の言であるだけに力強く説得的である。以上を要するに、幾つかの惜しまれる点はあるにせよ、本書は、南インド史研究についての恰好な手引き、入門書であり、氏の **A History of South India** と併読すれば、南インド史の研究に際して知つておかなければならない基本的知識を身につけることが出来よう。さらに、最後にあえてつけ加えるならば、その第一章は、南インド史の研究者のみならず、インド史の研究を志す全ての者が一読して然るべきであろうかと思う。　（一九六六年八月）

（**K.A. Nilakanta Sastri: Sources of Indian History with Special Reference to South India. Asia Publishing House, Bombay,** 1964, 113p., 14×23cm.）

注

(1) シャーストリー氏の経歴はかなり知れわたっていると思うが、以下に簡単に記すと、氏は Tirunelveli の Hindu College の Lecturer in Indian History に始まって、Benares Hindu University, Chidambaram の Sri Minakshi College 等に奉職したのち、一九二一年Madras University の Professor of Indian History and Archaeology となり、以後長年マドラス大学で教鞭をとった。その後は一時 Mysore University の Professor of Indology となったが、最近はユネスコの Institute of Traditional Culture の所長として、マドラス大学の中にあるその一室に通われている。一九五七年には来日されたこともある。その主要著作は次の如くである。

The Pandyan Kingdom (London, 1929)

Studies in Cola History and Administration (Madras, 1932)

The Colas (Madras, 1935, 1937, Rev. ed. 1955)

Foreign Notices of South India (Madras, 1939)

South Indian Influences in the Far East (Madras, 1939)

A History of South India (Oxford, 1955, Rev. ed. 1958)

Development of Religion in South India (Madras, 1963)

The History and Culture of the Tamils (Calcutta, 1964)

(2) Heras Institute とは、一九二二年ジェスイット会から派遣され、ボンベイの St. Xavier College のインド史の教授となった Rev. Henry Heras, S.J. が設立した Indian Historical Research Institute の後身であり、Heras Memorial Lecture は、一九五五年ボンベイでなくなったその Father Heras を記念して、Heras Memorial Fund の後援によって行われる特別講演であり、第一回の講演は、一九六〇年に H.D. Sankalia 氏によって行われた。

(3) 目次によれば、第二章の表題は South India about A.D. 1300 で、about の前に to がないが、それは誤植である。

(4) この Historical Method は、そもそも氏の Historical Method in Relation to Problems of South Indian History (Madras, 1941) の改訂版であり、その意味からも、また後述のように、それがマイソール大学の教授資料であるという点からも、やはりどちらかと言えば、南インド史の史料についての解説が詳しい。

(5) 主に利用されているのは、C.H. Philips (ed.): Historians of India, Pakistan and Ceylon. Oxford, 1961 である。

(6) しかし、全般的に言えば Historical Method の方が、史料についての記述はより詳細である。

(7) ただ、シャーストリー氏の記述は、史料に限られていて、研究書にはふれていない。今記したように、概説書のない現状を考えれば、ここでそれを多少とも補っておくのも意味があるであろう。

ヴィジャヤナガル期以前の南インド全般については、時期と地域が限定されるが、R. Sathianathaier: Tamilaham in the 17th Century (Madras, 1956) があり、さらに、当時の地方政権については V. Vriddhagirisan: The Nayakas of Tanjore (Annamalainagar, 1942), R. Sathyanatha Aiyar: History of the Nayakas of Madura (Oxford, 1924), K.D. Swaminathan: The Nayakas of Ikkeri (Madras, 1957), C.S. Srinivasachari: Histoire de Gingi (Pondichéry, 1940) 等の研究書がある。

マラータの進出については C.K. Srinivasan: Maratha Rule in the Carnatic (Annamalainagar, 1945) がある。

また、最近発表された

N. Mukherjee: The Ryotwari System in Madras (Calcutta, 1962), Dharma Kumar: Land and Caste in South India (Cambridge, 1965), R.E. Frykenberg: Guntur District 1788-1848 (Oxford, 1965), T.H. Beaglehole: Thomas Munro & the development of administrative policy in Madras 1792-1818 (Cambridge, 1966) は夫々異った問題についての特殊研究ではあるが、それらの扱っている時代・問題についての資料をうかがう上からも、有益な著作である。

ラナジットグハ著

ベンガルに対する所有権の支配

——永代定租制の理念に関する一試論——

高　畠　稔

E=ストウクス「イギリスの功利主義者たちとインド」(一九五九) 以来の欧米における近代インド史研究の動向として、植民地支配政策の源泉をヨーロッパの諸思想、諸学説に求めて、両者の関係を追求することが、さかんに行なわれている*。本書はそのような新しい動向から生まれた一研究であ